

若者の海離れを防ぐために私たちにできることは何か。

3408A班



I 序論

海離れが進んでいる今、気仙沼への関心が薄れ、次世代(高校生)が気仙沼から離れていくことを防ぐにはどのようなことができるか。

仮説:海と子どもの心理・物理的な距離感は子どもの海への思いにも影響を与えているのではないか。



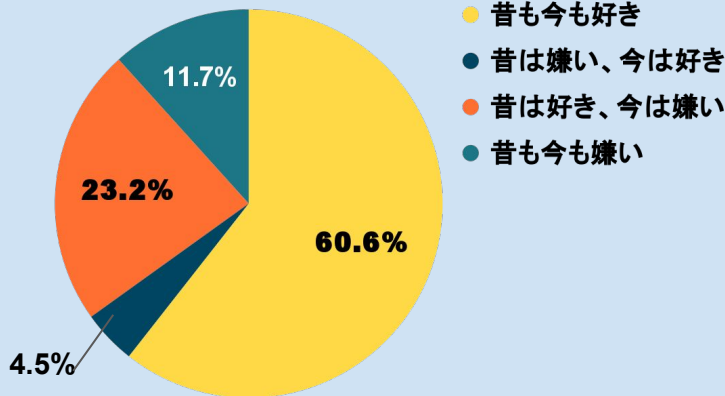
II 方法①

海に対する思いの現状、どのようなことを行って関心を高めるべきかを調査する

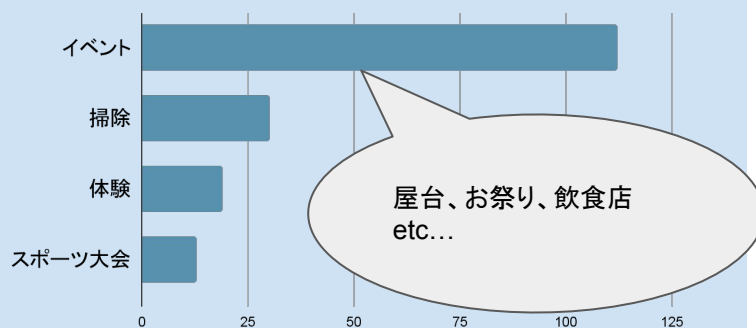
気高の1、2年生(261人)を対象にアンケートを実施する(2021年12月1~13日 実施)

- Q1:海は好きか
Q2:どんな取り組みがあれば海に行きたいと思うか

III 結果 Q1「海は好きか」



Q2「どんな取り組みがあれば海に行きたいと思うか」



IV まとめ

●Q1、方法②により、仮説として提示した海との距離感の関係については、物理的な距離感が海に行きやすい環境を作り、心理的な距離感を縮めている。

このことから、内陸部に比べ沿岸部はイベントやクロスカリキュラムが行いやすく、海と関わりが持ちやすい環境である。

●Q2より、私たちは海離れを食い止めるためにイベント(屋台、飲食店)などを開催することが特に有効的である。



海と子どもの心理・物理的な距離感はいかに影響しあっている、子どもへ**プラス・マイナス**の影響どちらも与えている。

※クロスカリキュラムとは関係するいくつかの教科を相互に関連させて学習すること

方法② 宮城教育大学のS教授に質問をする

Q1:海が子供に及ぼす影響とは

A:海が好きになる。
危険を身をもって体験できる。

Q2:距離の近さとの関係はあるか
A:ある。内陸部は海を感じづらい。

Q3:震災後生まれた子供が海に対するよい印象を受けるのはどこからか
A:家族など身の回りの人間。

Q4:学校教育において行っている海離れ対策とは
A:ほとんど行っていない。
(海に関する教育を行っていない)

Q5:海に興味を持ってもらうための有効的な方法とは
A:クロスカリキュラムで他教科と組み合わせて海と関わる。

V 課題

調査対象が海沿いの人に偏ってしまったため、多くの情報を得ることができず、内陸部と比較することができなかった。

また海離れを防ぐためのイベントを実行に移すことができなかった。

今後の目標としては、コロナの状況を見ながら実際に夏頃にイベントを行ってみる。

参考文献

「海離れ」記事への書き込みコメントから見た海水浴の減少要因—海浜空間の保全と利用に関する研究— 田島佳征、畔柳昭雄

https://www.ijstage.ijst.go.jp/article/ceispapers/ceis34/0/c34_7/_pdf-char/jaeis (閲覧 2021年10月2日)